

# EXPOSE

発行:農工学生会

編集責任:塩崎、椎名

(編集者若干名、募集)

## 農学部再編斗争

## すべての戦線で果敢な斗いに起き上がれ!!

一九六九年春。東大、日大、中央、京大等全国數十大学における、学園斗争の斗いの炎が燃え盛る中から生れ出た、新学友に農学部学生会は、昭和三九年來、延々五ヶ年間にわたりて斗い続けられている農学部再編斗争の斗いの炎を倍加し、我々自身の「大学」に於ける思行の道標を真紅に照らし出し、それをもつて新学友の歓迎と変えたい。

農学部再編斗争の新たなる質によつて一大発展期に飛び込んできたある。しかしその偶然は「固の触媒を添加することによつて、必然に変化する。その必然性を引き出す薬品こそ「自己を見つめる目」である。その生産物こそ人間であり、その過程が学問である。その意味で学問リ創造は斗いの内にある、又逆に斗いリ創造リ学問とも言える。しかし「大学」は我々に何も与えてはくれない。唯、いかにして我々が「大学」から奪うか、奪はぬかといふ事だけである。その奪還の過程が「我々の大学」創造の過程であり、「自らの学問を自らの手で」のスローガンを実質化していく過程である。

この農学部再編斗争は昭和三九年のストライキによってはじまる。それは必然的斗争であつた、志達の非和解的斗争心は、権力の抑圧的拘束にもかかわらず、日々育くまれていて、と言つても過言で

大學であり、入学者も全員入学、又それに学部長選挙にからむ所謂下田事件に見られるような、極度の教育、研究の輕視された学部であつたためである。いわば分業としての大学に於けるすべての敏よせ点が農学部であつたのである。

それは単に「大学」の枠内では決して理解出来ない。農学部が下部の状態になつて表われる。その社会的動向下、日本資本が帝国主義に変遷する中にあつて、農

学部に合つては、三九年度ストラ

イキ斗争によつて勝ち取られた協定書にのつとり、教授会代表4名、学生会代表4名(所謂「学生参加」)のもとに、農学部再編準備会を作り、そこで現代資本にとつて有効性の有る農学大系をひこうとした。

そしてその実現されたものが現在九百六十坪のうち九百坪だけ要求することになつている

との学部長の発言があり実質的に坪だけ要求することになつている。その全責任はすべて教授会に有る。

我々は以上の歴史的時間性と現実的問題を運動を通して見い出さなければならぬ。その運動の獲得物の一つは農校舎であり、又一

返し、幻想としていた虚構性を現実で碎こうと思った。そのことは内なる東大を取らえて斗う、自己否定リ自己実現かもしない……。

自己否定リ自己実現は、大学幻想共同体を突破し、情況の核心を貫ら抜いて、國家幻想を越えていた

のだと思う。君、そして生田の学友諸君、僕が心残りに思うのは、

友達の過失だ。

僕が心残りに思うのは、

友達の過失だ。

